こ　ん　袋

美谷島いく子

「こん袋」との出会い

私は、小さな端切れを、何枚も丹念に綴り合わせた、ひとつの小さな袋「こん袋」に出会った。

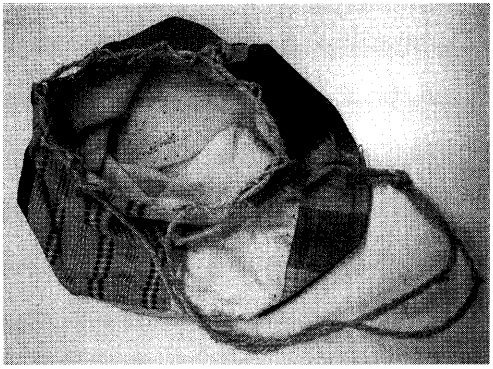
それは、側面に、黒三枚、赤四枚、鴇色（ときいろ）とクリーム色一枚、灰色とベージュの格子一枚の計九枚と、ショッキ

▲　写真１　「こん袋」　黒と赤の対比に目を奪われる。

ングピンク一枚の底から成る、それぞれ大きさの違う端切れが、黒の木綿糸で、一針一針ていねいに縫い合わされた袋である。側面の鴇色とクリーム色の一枚のみが、少し光沢のある化繊の他は、木綿。袋の口には、紐が通るように、麻紐が千鳥掛けで付けられ、そのループに、ごわごわした麻紐が通されている。

裏面は、梔色（くちなし）の布が使われ、小さな破れ穴は、同じ布で、ていねいに繕われている。

▲ 写真2 「こん袋」
ショッキングピンクの底が付けられている。



▲ 写真3 「こん袋」
裏の小さな破れも、ていねいに繕われている。

その大きさは、長さ32㎝、幅27・5㎝～29㎝（底の方にゆくにつれて広くなる）、底の長さ15㎝、底の幅15・5㎝、口紐の長さ、つぼめると65㎝、口を拡げると45㎝である。

木曽の黒川渓谷一帯では、陰暦の十一月二十三日（今

の十二月二十三日）の夕方、イギリスやアメリカの子ども達が、クリスマスに、暖炉の前やベッドの足元に、靴下をつるすように、子ども達が、この「こん袋」を、家の入口に、願いを込めてつるす。

すると、霜月下弦のこの夜、雪の中を、大師様が訪れ、「こん袋」の中に、子どもの喜ぶ贈り物を入れて去ってゆくという。

私は、この「こん袋」を見た時、黒と赤、黒とショッキングピンクという色合わせの強烈さに目を奪われた。よく見ると、黒は、黒と灰色の縦縞が二種類、赤は、黒い水玉と白の模様があるし、ショッキングピンクには、白い縦縞が入っているというふうで、一枚一枚は、地味な布である。それが、大切に綴り合わされることによって、新しい生命を与えられたかのように、強烈に、私に迫ってきた。

机上に、平らに置いてみても、あちこちに、でこぼこ皺が寄り、一針一針の間に、昔々の炉端の会話と、これを作った人の温もりが閉じ込められているような、この単純素朴な「こん袋」から、私は、この袋を作った、黒川の女達の、大師様を迎える、子どものような弾む心、喜びの心を聞き取ったのである。

「こん袋」と出会ってから私は、この「こん袋」は、誰によって、どんなふうに作られたのだろうか。大師講の夜、「こん袋」は、どんなふうに、子どもによってつるされただろうか。「こん袋」の中に入れられた、子どもの喜ぶ贈り物とは、具体的には何だっただろうかと、様々に、「こん袋」をめぐって、思いを巡らせていた。

この一枚の「こん袋」が収集されている、松本城わきの日本民俗資料館にも調べに行った。しかし「民間信仰資料コレクション」として、昭和三十四年五月六日に、国の重要民俗資料に指定される以前から、資料館にあったもので、西筑摩郡新開村（現、木曽郡木曽福島町）で用いられていたという以外、記録カードは白紙のままで、具体的な詳しいことは、何もわからなかった。

それ以来、私は、この「こん袋」が作られ、霜月下弦の雪の夜に、大師様の訪れを待ち望む子どもによって、つるされた、黒川渓谷という土地を、一度は、訪ねてみたいという思いにかられていた。

娘の夏休みが終わった八月十八日、私は、やっと黒川渓谷を訪ねることができた。

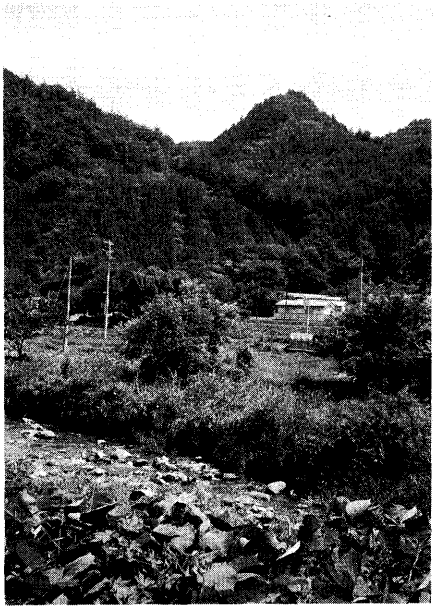
「黒川渓谷を訪ねて」

松本では、やっと咲いた百日紅の桃色の花が、小雨に濡れていたが、一時間、列車に乗り、木曽福島駅で下車すると、日が差し始めていた。

タクシーは、豊かな水をたたえた黒川渡ダムを過ぎると、飛驒高山へと通ずる山間の道を、黒川の清流に沿って登ってゆく。「こん袋」のことを調べに黒川村へ行きたい旨、告げる。中年のタクシーの運転手さんも、この奥の村の出身と言うが、「こん袋」のことは知らないという。無線で、問い合わせてくれるが、誰も知る人はなく、「うんと年を取った人のいる家へ行かなければ」と言って、案内してくれたのが、車で十分位の、古幡さんの家であった。

古幡さんの家は、「渡合」というバス停の近くにあり、二百五十年前に建てたという、大きな栗材の本棟造

◀ 写真4　木曽福島町黒川。黒川と山々が迫る古幡さんの家付近。



りの家で、今は、民宿をやっておられる。

古幡さんは、奥の囲炉裏端へ、私を案内し、「こん袋」を楽しみにしていた、子どもの頃の生活について、語ってくれた。天窓から差し込む陽光が、煤けた梁や帯戸、自在鍵にかかった鉄びんに注ぐ。

山間の村だから、耕地が少なく、米は食べる丈。冬期の炭焼きの山仕事の他は、この母家で蚕や木曽馬を飼って、現金を得る生活であった。

小柄で、おとなしい木曽馬は、農耕、運搬に重宝されるので、母屋で大切に飼われており、木曽福島で、七月と九月に開かれる馬市で、岐阜、愛知の農家へ博労を通して売られていった。

「こん袋」は、「日常や祝儀、不祝儀等に、米、米の粉、大豆、小豆などを入れて義理をすませたりする贈答用の入れ物」（『木曽―歴史と民俗を訪ねて―』木曽教育会刊）である。

古幡さんの所では、年寄りが、着物の端切れを、何枚もはぎ合わせて、「こん袋」を縫いあげ、居間の箪笥の引出しに、何枚か入れてあった。木綿のものの他に、家で養蚕をし、機を織った絹の布地を綴り合わせた美しい「こん袋」もあり、それには、繭からとった真綿を、三編みにした生成（き）りの紐が通されていたという。しかし、残念なことに、古幡さんの家には、「こん袋」は、今は、ひとつも残っていない。

子どもは、親に頼まれて、親類の家やお寺などに、新盆や新御魂（あらみたま）の折に、「こん袋」を持ってお使いをしたという。

この「こん袋」を、大師講の夕方丈は、子ども達は自分自身への贈り物を入れてもらう為に、つるすのである。

「大師様―霜月下弦の夜の客神―」

「明日は、大師講だよ」と、両親や祖父母に教えてもらうと、夕方、子ども達は、引き出しから、各々の「こ

ん袋」を取り出して、家の入口の、松飾りをする柱の所につるした。又、中谷部落では、厩の馬をつなぐませ棒に、芝原部落では、土間のわらたたき石の上に、子ども達が、願いを込めて、「こん袋」をつるした。子どもが、三人いる家では、三つの「こん袋」が、五人いる家では、五つの「こん袋」が、玄関先や、土間や、厩にかけられた。

◀ 写真5　古幡さんの家の入口。この紐の所に「こん袋」をつるした。

陰暦のこの日は、一年中で、最も昼の短い冬至にあたり、月は、満月が半分になる下弦の月で、二十三夜にあたる。一年中で、最も太陽の力が衰えるこの日、家の門口で、茄子の枯れた茎で火をたいて、太陽の復活を祈る習慣があったというが、それが、いつか、弘法大師や聖徳太子を祭る、大師講（太子講）に変わったという。黒川では、「大師様は、神通力があって人を助けてくれる」と言われていた。

太陽の力がだんだん衰えて、周りの世界が色を失ってゆく中で、客神大師様を待ちわびて、一年中で一番長い夜、子ども達によってつるされる「こん袋」。黒川の老婆達は、「こん袋」の中にこそ、太陽の蘇りと、新しい年の豊穣を夢みて、黒と対極にある、赤やショッキングピンクという色合せを楽しんだのではないだろうか。

この季節の境目の、聖なる夜に、大師様が、山深い、

黒川渓谷の黒川、橋詰、芝原、中谷という村々を訪れ、「こん袋」の中に、子どもの喜ぶ贈り物を入れて、そっと去って行った。

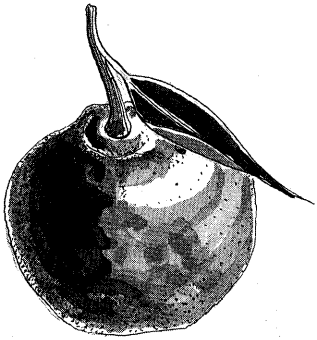
大師様からの贈り物は、一針一針に、新年の豊穣を祈って刺された、「こん袋」の温もりに、そっと包まれて、子ども達の手に届くのを待つ。

その夜、黒川では、訪れてくる客神、大師様に供える為に、小豆のおはぎを作り、仏壇に供え、新しい年の豊穣や幸福を祈って、皆で食べたという。

この夜は、不思議なことに、必ず雪が降るという。雪がちらちら降り始めると、人々は、「大師様だで、雪が降る」「大師様がこちらに回って来た」と言った。その雪の由来は、『跡隠しの雪』という伝説として伝わっている。

翌朝、子ども達は、早起きして、楽しみにしていた「こん袋」をあける。子どもの賑やかな歓声とともに、復活した新しい太陽が登る。春の訪れの第一歩である。

「こん袋」の中には、キャラメル、飴などの御菓子、ミカン、ノート、鉛筆、消ゴムなどの学用品や、『小学一年生』などの雑誌が入っていた。古幡さんの話では、買った物が多かったという。今のように物が豊かになかった当時のこと。子どもの喜びは、どんなであったろうか。子ども達は、新しく降り積もった雪で、大師様の足跡は見ることができなかった。

これは、今から五十数年前の昭和十年前後まで行われていたことである。

（松本市在住　舞々同人）